

北朝鮮の後継者はジュエか

毎日新聞客員編集委員 鈴木琢磨

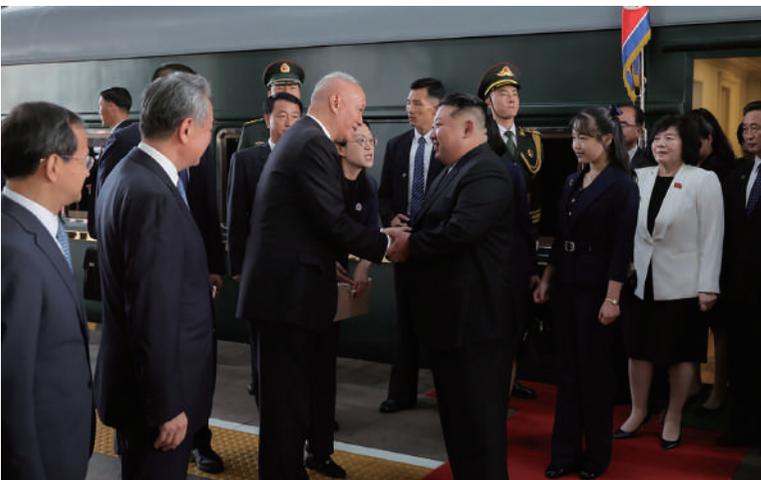
金正恩の娘、ジュエが北朝鮮メディアに登場して2025年11月で3年になった。あどけなかった風貌もみるみる間に大人び、その存在感を日ごとに増してきている。はたして彼女は金王朝の4代目後継者なのか？

2025年9月3日の『労働新聞』（朝鮮労働党機関紙）に気になる記事が掲載された。1面は前日、平壤から北京に特別列車で到着した金正恩のニュースで埋められている。ジュエも同乗し、父に続いて列車を降りるシーンをとらえた写真が添えられていた。記事にジュエへの言及はなかったが、父の訪中を

補佐する姿を人民は目にしたことになる。ただの訪中ではない。北京で開かれる戦勝節（抗日戦争および反ファシスト戦争勝利80周年大会）の軍事パレードに参加するためだ。しかも中国の習近平、ロシアのプーチンと天安門の楼上に並んでの閲兵である。金正恩の威信をこれ以上ないほど高めるとともに、北朝鮮の歴史に刻まれる重要な外交史の舞台に愛娘を帯同したことになる。

問題の記事は2面にあった。

「偉大な金正恩同志の革命思想で徹底して武装しよう！」。さほど目を引くタイトルではないが、中身が唐突、かつ意味深長だ。



特別列車で北京に到着したジュエ、父の真後ろにいる（朝鮮中央テレビから）

わが国の固有の特徴はもうひとつ、革命偉業の継承問題を完璧に実現した継承性が確固とし、前途洋々たる国だということだ。わが共和国は些少な偏向や紆余曲折もなく、継承問題を成功裏に解決してきた。わが国では昔から革命の代を継ぐことを万年之計（百年の大計）の国家大事とし、その事業に多くの労力をかけてきた。領導の継承問題を党と革命の前途を左右する根本問題、社会主義国家政治体制の継承における根本問題とし、理論的、実戦的に完璧に解決したところ、主体朝鮮の限らない自慢であり、誇りである。

『労働新聞』は人民の羅針盤になっている。隅々まで読み、学習しなければならぬ。1面だけさっと目を通し、小難しい2面の論説を読み飛ばすことなどできない。つまり、金正恩が娘と訪中した事実を1面の写真で確認し、2面でその意図を知るわけである。現時点で人民は彼女を金正恩の娘と認識している。メディアで「尊敬するお子

さま」などの尊称がつけられ、ごく自然に特別な存在に後継者だろうと見なしているはずだ。名前やプロフィールは明かされておらず、発言も公表されていないが、人民はそのあいまいさを受け入れているに違いない。

この論説記事はたまたま掲載されたのだろうか？ そんなはずはあるまい。計算され尽くしていると筆者は考える。あらかじめ用意しておいた継承問題にからむ記事を、ジュエが父に同行して訪中するタイミングにあわせ載せたのではないか。9月3日の新聞で継承問題についてあえて論評する必然性はない。ただひとつ、ジュエの事実上の外交デビューを報じるXデーだったということだけだ。

筆者の愛用する『朝鮮語大辞典』（平壤・社会科学出版社、1992年）にちょっと意外な言葉が収録されている。「後継者問題」だ。国語辞典にもかかわらず、「後継者」だけでなく、わざわざ「後継者問題」なる言葉まであるのは、この言葉がいかにかの国にとって重要かを示している。むろん、

金日成から息子の金正日への権力世襲が首尾よく成功したからにほかならない。辞典の語義はこうなっている。

「労働者階級の党建設で、党の運命、革命の運命と関連するもっとも重大な問題であり、代を継ぎ、継続する労働者階級の革命偉業を曲折なく、最後まで完成させる根本問題だ。わが国では後継者問題が輝かしく解決された」。

『労働新聞』の論説記事と似通う。

ジュエは天安門には現れなかった。習近平やプーチンをはじめ外国要人に会った形跡もない。宿舍とした在北京の北朝鮮大使館にこもっていたようである。いったい、どう過ごしていたのか？ そのヒントがある。いまから60年前の1965年4月、金日成は若き金正日を伴い、インドネシアを公式訪問した。スカルノ大統領は世界最大の熱帯植物園で新種のランを「金日成花」と名付け、プレゼントした。まだ存在が知られていなかった金正日だったが、異国の地で秘書のごとく振る舞い、宿舍で父が疲れを癒やし、快適にくつろげるよう気をつかったと述懐している。

のちに出るであろう「金ジュエ伝」にも同様の孝行娘のエピソードが欠かさない。その伏線としての外遊同行だったのではないか。

ジュエのプロフィールはいまなおベールに包まれている。現時点で4代目後継者だと断言まではできないものの、筆者はその可能性は高いとみている。金正恩のジュエへの溺愛ぶりが尋常でないからだ。2015年10月、平壤を流れる大同江に父、金正日の遺訓のひとつとされる豪華遊覧船「ムジゲ(虹号)」が就航した。4階建て、乗客定員は1230人。船内には朝鮮料理だけでなく、回転ずしならぬ最新式ベルトコンベア式ビュッフェレストラン、さらに野外デッキレストランまであり、世界中の料理が楽しめる胸を張った。食糧不足の国に似つかわしくない贅沢なグルメ船である。だが、この遊覧船こそ、ジュエを軍や党幹部へ披露する舞台となっていたのだ。就航に先だつ9月28日、『労働新聞』の1、2面をつぶし、金正恩が遊覧船を妹の金与正らと視察する記事が載るが、その場

に幼い娘を連れてきていたとの複数の目撃情報がある。ジュエは2013年2月生まれとされるから、2歳だ。記事に添えた17枚の写真にジュエらしき姿はないが、金正恩は娘を幹部らに紹介、終始、ご機嫌だったという。

なぜ、9月28日に報道したのか？実はこの日は金正恩が愛する妻、李雪主30歳の誕生日だったのだ。中世さながらの王朝国家ゆえ、北朝鮮は金正日の母(金正淑)、金正恩の母(高英姫)を「尊敬するオモニム(お母さま)」とたたえてきた。夫をそばで支えるだけではない。最も重要な役目は世継ぎを産むことにある。儒教色が濃く、男児が「世子」となるのが一般的だが、わざわざ母の誕生日にあわせ、娘をゴージャスな船上デビューさせたのはいわくありげだ。金正恩は妻への慰労に加え、すでにこのとき娘を後継者にと内心、考えていたのではないか。

そもそも金正恩に娘がいて、その名が「ジュエ」らしいとわかったのは2013年9月のことである。金正恩が大ファンの元米NBA選手のデニス・

ロッドマンを北朝鮮に特別待遇で招待し、彼が金正恩の別荘で初めて娘に会ったと明かしたのだ。女の赤ちゃんをだっこし、名前が「ジュエ」だと金正恩から直接、耳にしたという。聞き間違えた可能性もあるが、筆者も知るロッドマン訪朝に同行したカナダ人通訳は朝鮮語に堪能だった。ハングル表記まできちんと確認できなかったにせよ、発音は「ジュエ」にほぼ近いだろう。

「遊覧船でのお披露目後も金正恩は娘をあちこち連れ歩いていたと高位級脱北者の証言から把握しています。風貌が自身とそっくりだったのがうれしかったでしょう。金正日が金正恩を後継者に選んだのは兄の正哲の性格が内向的でリーダーにふさわしくなく、細面の母親似だったからだといわれています。金正恩は金日成から続く白頭の血統であることが一目瞭然ですから」。そう語るのは日朝関係筋だ。また2016年4月に訪朝した元「金正日の料理人」、藤本健二は当時、筆者にこう語った。「正恩氏や与正氏らと食事をしましたが、李雪主夫人はいなくて。正恩氏にたず

ねると、娘が風邪をひき、母と一緒に隔離中とのことでした」。娘の存在を隠すふうではなかったらしい。

そんなジュエが白いダウンジャケットを着て公の場に現れたのは2022年11月である。ICBM（大陸間弾道ミサイル）「火星17型」の発射に立ち会った父の金正恩に同行したのだ。髪をポニーテールにまとめ、青いリボンで結んでいた。足元はぴかぴかの赤い靴。サプライズデビューの衣装を白、赤、青にしたのは国旗の配色にあわせてたコーディネートだ。同じころ、子どもらが国旗をあしらったTシャツを着る愛国運動が起きている。後にジュエの発案、偉大な革命活動であったと宣伝しようとしているのかもしれない。

北朝鮮メディアはジュエを「愛するお子さま」「尊敬するお子さま」「尊貴であられるお子さま」などと称し、特別な存在だとおわせ続けている。金正恩と娘の2人を「嚮導の偉大な方々」と最高指導者にもみ用いられてきた代名詞でも呼んだ。さらに娘をクローズアップした写真まで出してきた。だが、

筆者がジュエを後継者に内定した蓋然性が高いと判断した決め手は「白馬」である。金日成の時代からかの国では白馬こそ、民族の英雄、カリスマ性を宿した偉大なリーダーの象徴と見なされてきたからにはかならない。

2023年2月8日、平壤の金日成広場であった軍創建75年の軍事パレードにジュエの白馬が登場したのだ。先頭は金正恩が革命の聖地・白頭山で馬行軍をした伝説の名馬だとの解説に続き、朝鮮中央テレビのアナウンサーは興奮気味に「愛するお子さまが最も愛している駿馬」とのナレーションを流した。写真や映像は報じられていないものの、ジュエはすでに白馬を乗りこなしているのだろう。これらの白馬はすべてロシア産、プーチン大統領からも贈られた。

対外秘の写真が平壤郊外の美林乗馬クラブにある。2013年にオープンした乗馬好きの金正恩肝いりレジャー施設だが、敷地内の革命事績教養室に金縁の額に入った写真がうやうやしく飾られている。撮影は固

く禁じられている。ラフな半袖シャツで白馬にまたがるのは金正日。その後の白馬には緑色のスウェット上下にサングラスをかけた少年が乗っている。金正恩だ。おそらく平壤の邸宅か、地方の招待所だろう。説明板には「1990年9月16日」とある。金正恩6歳のときのスナップ。すでに「帝王学」として父からじきじきに乗馬を習っていた証拠だ。

むろん、ジュエ後継を否定する意見も根強い。なんといっても女性だからだ。



軍事パレードに登場したジュエが「最も愛する駿馬」(朝鮮中央テレビから)

だが、ここに興味深い資料がある。金日成から金正日への世襲のとき、東京で出版された金裕民『後継者論』（1984年）だ。全文朝鮮語、奥付を見ると、発行所はソウル・新文化社、翻刻発行は在日本朝鮮人総連合会傘下の九月書房とある（1986年）。

後継者の資質と風貌を完璧に備えたすばらしい人物であったならば、男性であれ女性であれ、壮年であれ青年であれ、または革命活動の歴史が長かろうが短かろうが問題にはならないのである。これは首領とその後継者に血縁関係があるかどうかという問題についてもまったく同じだといえる。ゆえに、ある人物が後継者としてのあらゆる資質と風貌を備えている場合には、その人物が首領と血縁関係にあったといっても、後継者として選出できないという論理は成立しえないのである。

在日社会にも広がっていた世襲への批判をかわすため、北朝鮮が後継者選定の論理を構築していたのである。ポ



金日成も幼い正日（杯をあげる隣）を同行させていた（北朝鮮の対外ウェブサイト「朝鮮の今日」から）

イントは「男性であれ女性であれ」と言及した部分だ。当局お墨付きの『後継者論』は明確に女性であっても後継者になれると説いている。息子である金正日を念頭に置いてのものだが、論理上は女性後継者も可能だといっている。おもしろいのは後継者にふさわしい条件に「資質」と「風貌」を並べているところだ。でっぶりし、いかにも東洋の大人ふう。そう、建国の父、金日成が理想なのだ。彼は毛沢東を意識していた。ジュエもあてはまるではないか。もうひとつ、ジュエ後継説否定派が



金日成の娘、金慶喜。朝鮮戦争後、戦利品の展示を視察している。服装に注目（朝鮮中央テレビから）

主張するのは露出が早すぎる点だ。なるほど、まだ10歳そこそこのジュエが金正恩とミサイル発射現場や軍事関連施設に足を運んでいるのは首をかしげたくなるシーンだが、先入観は捨てたほうがいい。なぜなら、金日成は建国まもなく、幼い金正日を軍官学校の卒業式に同席させていたし、朝鮮戦争の直後には息子だけでなく娘の金慶喜までも戦争関連イベントに同行させていたのだ。当時の北朝鮮メディアが報道しなかっただけなのである。さらにこんな過去も見逃せない。熾烈をきわめた朝鮮戦争の休戦からほど

ない1953年8月17日、平壤で朝鮮人民軍総合展覧会が開かれ、米軍から奪った戦闘車両などの戦利品を金日成が視察した。ちょうど70年となる2013年8月17日、朝鮮中央テレビが展覧会を回顧した。筆者は画面にクギづけになった。金日成が息子と娘を連れ、戦利品を眺める写真が大写しになったからである。金日成は灰色の人民服に帽子、正日もそろいの服装、慶喜はピンク色のおしゃれなワンピースである。かつて同じときに撮影された金日成と正日のツーショットは幹部向けの写真集で見たが、慶喜はカットされていた。

金日成は二人のわが子に戦利品を見せ、米国などの敵に「勝った」と実感させようとしたのだ。だが、慶喜は場違いなお嬢さまファッションだった。平壤は爆撃で焼け野原、さすがに娘が映り込むのはふさわしくない、とトリミングしたのである。だが、その問題写真の封印が解かれた。「1号写真」と呼ばれる最高指導者からむ写真の扱いは金正恩か妹の与正しか決められない。祖父が幼いわが子を軍事関連施

設に連れ歩いていたという「史実」をリアルな写真でアピールする必要があったからではないか。慶喜は女性だ。ジュエを意識しての解禁だったに違いない。話を戻そう。世界の視線が集まった父の訪中に寄り添ったジュエだが、帰国後、ビッグイベントに姿を見せなくなった。彼女の動静が確認できたのは2025年10月5日深夜に朝鮮中央通信が配信した2枚の写真が最後だ。訪中を終え、平壤へ戻る列車内で車窓に映る風景を父や幹部とながめる1枚、平壤に到着した列車から父と下車する



記念切手にまで登場したジュエ

1枚のみである。2025年は朝鮮労働党の創建80周年の節目にあたる。10月6日には金正恩肝いりの平壤総合病院が竣工したが、式典に彼女はいなかった。さらに党創建記念日の10月10日に金日成広場であった軍事パレードも欠席した。

2023年9月9日の建国75周年の軍事パレードでは主席壇で金正恩と並び、笑顔で拍手していたことを思えば、不可解といわざるをえない。一説には近く招集される第9回党大会を控え、金正恩の権威をいっそう高めるため、娘の露出を控えているともされるが、説得力はない。

筆者はメディア・デビューして3年を迎えたジュエの存在感を増すため、北朝鮮当局がひそかにサプライズ映像を準備しているのではないかとみている。2か月以上にわたる謎の空白時間がそれを示唆している。ひょっとしてジュエが革命の聖地・白頭山への白馬行軍を予定しているのではないか。重大な政策決定がなされるとき、その直前にメディアを通じ、白馬にまたがっ

た金正恩が白頭山を駆ける映像を流してきた。それも吹雪舞う季節が多い。ときに夫人の李雪主や妹の与正、党や軍の幹部を引き連れることもある。白頭山の強風と靈気を浴び、厳しい革命の道へ邁進する姿を人民に印象づけるためだ。

筆者の手元に「金正恩伝」ともいべき内部向けの学習資料がある。後継者への歩みがドラマチックにつづられている。それによれば、金正恩は1998年10月1日、わずか14歳のときに両親と白頭山に登り、初めて後継者になるとの宣言をする。「白頭山の誓い」とされる。翌1999年の戦勝節（7月27日）には米軍の金星親衛第155軍部隊を訪れ、軍人たちと歴史的な談話を行う。文書は「革命武力に対する最高指導者同志の初の現地指導であった」と明記している。そしてドラマのラストは2005年5月17日。金正恩は祖父が生まれた平壤の万景台に出向き、「万景台家門の銃身の血統をしっかりと受け継いでいく」と後継者になる決意を改めて固くしたというのだ。



幼い金正恩が父と一緒に白馬にまたがっている

「銃身の血統」は核・ミサイル開発への強い意志だろう。

金正恩はジュエ後継者へのプロセスをオープンにしようとしているフシがある。女帝が君臨する「シン・北朝鮮」、某国情報関係者からこんな驚愕の未来像を聞いた。「金正恩は英国の王室に興味を持っています。国民に愛されたエリザベス女王をモデルにしたがっているのではないのでしょうか」。タイミンクからしてまもなく、父とそろって白頭山を白馬で駆ける写真が『労働新聞』に載り、朝鮮中央テレビで動画が

放映されるかもしれない。そうならば、彼女が後継者宣言をしたも同然であり、金日成から続く金王朝を支えるキラーコンテンツ「白頭山神話」の第4部—ジュエ編がいよいよ幕を開けることになる。

（2025年11月13日・公開講演会）

本文中の写真

「ジュエ、金一家のスナップショット」

*出所：記載のないものは筆者所蔵

筆者略歴（すずき・たくま）

ジャーナリスト。毎日新聞客員編集委員。テレビ・コメンテーター。1959年、滋賀県生まれ。大阪外国語大学朝鮮語学科卒。磯崎敦仁編著『北朝鮮を解剖する』（慶應義塾大学出版会）で金正恩小説を論じている。金正日の料理人だった藤本健二『引き裂かれた約束』（講談社）の聞き手も務めた。千葉で平壤冷麺「ソルヌン」を経営する脱北女性の一代記を徳間書店から刊行予定。